信　心　と　救　い

中央仏教学院講師　**河　智　義　邦**

真宗学の講義をさせていただく中で、時々お聞きする質問の一つに、「生きているときにご縁がなくて、信心をいただけなかった方は死後に救われないのでしょうか？」という内容のものがあります。これに対しては、様々な答え方があろうかと思うのですが、ここでは、次の二点を中心に、これに対する基本的な考え方を述べてみたいと思います。

1．質問者自身の態度。誰の問題として信心の有無を問われているのか。

2．真宗における「信心」と「救い」はどういう関係にあるのか。

＜1について＞

まず、この質問を考えるにあたって、次の親鸞聖人の言葉をご紹介したいと思います。『歎異抄』に「聖人（親鸞）のつねの仰せ」として、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」（『註釈版聖典』853頁）という文があります。これは「阿弥陀仏があらゆる衆生を救おうと、計り知れないほどの長い時間おかけになって建てられ成就された願い（本願）のお心を深く思案すれば、それは、親鸞一人をお救いくださるためのものでありました。思えば、私は多くの罪業を背負っている身であるにもかかわらず、それを救おうと思い立たれた阿弥陀仏の本願のなんとありがたいことであろうか」と聖人が述懐された言葉です。ここに見いだせる聖人と本願(仏教の救い)との関係の特色は、『大経』に説かれる阿弥陀仏の本願の救いは「わが御身にひきかけて（自分の身のこととして）」（同頁）聞かなければならないという、主体的な求道の態度であり、他人事ではなく一人称での本願の救いを語っておられることにあります。つまり、誰が救われなければならないか。それは他ならぬ私自身であるという視点を抜きにしての救済論は語られていないのです。

この点をふまえて1のことを考えてみると、もしそれが真宗信心・自信教人信に生きている人であれば、当然のことながら教化・伝道に関わった方が、み教えを聞かれてもなお信心の世界に目覚めないままに亡くなられたら、その心配が出てくるのもわからなくはありません。しかし「真宗では、阿弥陀仏はあらゆる者を救うと説いているが、それでは信心なく、あるいは仏教や真宗に縁なく亡くなっていった者はどうなるのか」といった、三人称的にしか仏教を見れず、傍観者的な興味レベルでの問いの立て方ならば、①「救われる」②「救われない」どちらの答えを用意しても無意味なように思えます。そこには、①「それでは求道は必要ないのか」②「全ての衆生を救うのではなかったのか」といった不毛な結論しか出てこないように思うからです。ですから、まず自分自身が本願とどのような態度で関わっているかという問題をこの質問は含んでいます。真宗信心の有無の問題は、煩悩具足の凡夫である自己存在を外に置いて問うべき問題ではないのです。

そこで、聖人における「信心」や「救い」の問題は、何を起点にして、何を目指して語られているのか、その点を確認しておく必要があろうかと思います。

＜2について＞

聖人が「生死出づべき道」（『註釈版聖典』811頁）を求めて仏道を学び、法然上人のもとに参じて本願念仏のみ教えに出会われたことは周知の通りです。凡夫の身でいかにして迷いを離れ悟りを開いていくことができるか、この解決を求める中に獲信されていかれたのです。ここに真宗信心の問題が三人称ではなく、一人称で語られなければならない理由があります。信心とは主体的に生死出づべき道を求める人においてその有無が問題にされるという性質を持っているからです。

聖人は信心を得た者は、現生で「ほとけになるべき身」となると述べられています。仏教で救いを表す言葉として「済度」があります。済も度も、ともに渡すという意味があります。それは「到彼岸」とも表現されますが、仏教でいう救いとは、迷い（此岸）から悟り（彼岸）へ到る・渡ることを意味します。聖人は、「難思の弘誓は難度海を度する大船」（同131頁）と、真宗の「救い」を表現されています。つまり、仏に成っていくことを救いと表現されています。それは、現世に物質的な欲望や功利心が満たされることでも、死後にパラダイスに転生することでもなく、煩悩身のままに本願に目覚め、あらゆる衆生を大慈悲心をもって思うがごとく救っていける身（＝仏）に定まった境位をいいます。それが聖人が本願念仏に出会われて救われ歓喜された内実といえます。

時代を問わず、自己の煩悩が問題となっていない人に「浄土往生」や「墮地獄」の話をしても、リアリティが持たれないのは当たり前かもしれません。また、浄土や地獄が地理的空間上に実在するものでないことも自明の事実です。本願文にある「十方衆生」との呼びかけを、まさしく、私「一人がため」と聞き定めていくところに信心や救いが問題となってくるのです。そのように考えると、真宗伝道・教化も、求道心の必要性を説くレベルと、求道心を有する人に対するレベルのものと、二段構えに考える必要があるように思います。

（岐阜聖徳学園大学准教授：真宗学）